

## 林立する方形単郭の城郭群

滋賀県立大学教授 中井 均

近江の中世城館の最大の特徴は、1,300もの城館が築かれたことです。なかでも甲賀郡では1郡に約300もの城館が構えられています。なぜ甲賀郡にこれほどの城館が築かれたのでしょうか。その謎を解く鍵は、同名中<sup>どうみょうちゆう</sup>という甲賀独特の組織にあるようです。同名中とは戦国時代の甲賀郡で同じ苗字を持つ土豪同士の連合組織<sup>れんごうしゅう</sup>のことです。戦国時代の武家社会では惣領<sup>そうりょう</sup>を頂点とし、庶子家はその家臣団に組み込まれるという縦社会<sup>じゅうしやかい</sup>でした。ところが同名中では惣領家と庶子家が横並びとなる共和的社会を誕生させました。各同名中は戦国時代後半には甲賀郡内でまとまり、甲賀郡中惣<sup>こうかぐんちゆうそう</sup>となります。この惣領と庶子家が同等の立場となるということから、庶子家でも城館を構えることとなったのです。このため1村1城といった規模で城が構えられ、300もの分布となりました。しかも築城した土豪たちの権力は均一であることから突出した規模の城が構えられることはなく、甲賀郡内の城館はほぼ同一の規模、構造を有しています。

その構造は一辺3～50m<sup>ほうけいたんかくこうぞう</sup>の方形単郭構造という小規模なものです。ところが平面構造はこのように小規模なのですが、周囲に巡らされた土塁は残存する望月城、新宮支城などでは高さが8mにも達する巨大なものが築かれています。この規模は日本の戦国時代の山城では最大級のものとなっています。つまり甲賀の城館は平面では規模は小さいものですが、立体的には決して小規模な城ではなかったことを示しています。

ところで城は軍事的な防御施設です。わずか一辺50m程度の方形単郭の城が防御施設として役立つのでしょうか。甲賀同名中のひとつ、大原同名中の掟書のなかに、もし敵が来たときは、鐘を鳴らして領内の人々に知らせ、百姓はもとより僧侶にいたるまで、それぞれが得意とする武器を持って城に集まること



村雨城跡

や、手はしの城に各同名中から人数を差し入れることが定められています。ここに記された手はしの城とは敵正面に位置する城のことで、その城に同名中の各組織より守備兵を派遣して敵に対処していたようです。また、加藤清正が朝鮮出兵の折に中国東北部(満州)のオランカイというところまで攻め入ったのですが、その地では守護がおらず、村々<sup>ようがい</sup>に要害が構えられていて、昔の伊賀、甲賀のようであったと記しています。さらに清正はそうした村々を1村ずつ成敗したと続けているのですが、まさに甲賀のような1村1城のような形態の城では小規模ではあるのですが、ひとつでも無視して奥に攻め入った場合、背後から攻められる可能性があるため、どうしてもひとつずつ落とさなければならぬわけです。決して小規模であるといっても防御機能が低いわけではないのです。小規模ではあるものの、数を多く構えることによって大規模な城と同等の防御機能を果たしていました。

こうした同名中という組織は日本のなかでも甲賀にのみ出現したことより、2008(平成20)年に甲賀郡中惣遺跡群として、新宮城跡、新宮支城跡、寺前城跡、村雨城跡、竹中城跡が国史跡に指定されました。

中井 均(なかいひとし)

1955年大阪府生まれ。龍谷大学文学部史学科卒業。(財)滋賀県文化財保護協会、米原市教育委員会、長浜城歴史博物館館長を経て現職。びわこ学院大学、金沢大学非常勤講師。NPO法人城郭遺産による街づくり協議会理事長。専門は日本考古学。特に中・近世城郭の研究。